

あなたの 子供を 辞めました

母親から虐待を受けた少女が、
救われるまでの手記

中井宏美



あなたの
手紙を
子供が
辞め
常蔵した

母親から虐待を受けた少女が、
救われるまでの手記

中井宏美



あなたの^{こども}子供を^や辞めました

母親から虐待を受けた少女が、救われるまでの手記

2011 年 8 月 11 日 第 1 刷発行

著 者 ^{なか い ひろ み} 中井宏美

発行者 石崎 孟

発行所 株式会社マガジンハウス

〒 104-8003 東京都中央区銀座 3-13-10

受注センター ☎ 049-275-1811

書籍編集部 ☎ 03-3545-7030

印刷 + 製本所 中央精版印刷株式会社

装 幀 片岡忠彦

©2011 Hiromi Nakai Printed in Japan

ISBN978-4-8387-2255-6 C0095

乱丁本、落丁本は小社製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

あなたの

子供を

辞めました

母親から虐待を受けた少女が、
救われるまでの手記

私は平凡な家に生まれた。地方の建売住宅街の一軒家、家族は、共働きの父と母、そして兄弟たち。両親には定職があり、衣食住に事欠くことはなかった。家族の誰もが健康だったし、大きな事件に巻き込まれることもなかった。はたから眺めれば、平和で幸福な家族だったと思う。

けれど、私には母に愛された記憶がない。

わけもなく殴られ、無視され、家族の中で差別をされて、自殺を勧められたことはあっても……。

それでも、子供は親に愛されるのが当然だと信じてきた。それが正しくないと気づくまでに、いったい何年かかったのだろう。

CONTENTS

第一章	人付き合いの苦手な母	7
第二章	誰といてもひとりぼっち	23
第三章	迷惑をかけなければいいの？	62
第四章	社会と向き合えない	96
第五章	“教師”にさえなれば	135
第六章	振り切れない“母”という悪夢	174
第七章	“絶縁”という希望	204
あとがき		248

第一章 人付き合いの苦手な母

父と母の言葉をそのまま信じるなら、私の両親はともに結婚まで異性と交際した経験がなく、童貞と処女で結ばれたのだという。

両親は見合い結婚している。父方の叔母が経営する焼き鳥屋の常連客に母方の親族がいた。店主と常連客との間で話がまとまり、ふたりは出会ったという。しかし、成人してこの話を思い返し、親族内には焼き鳥屋の女将やその店の常連客といった人物が存在しないことに気がついた。

当時、父は三十二歳、母は二十六歳。それぞれ何度も見合いに失敗した経験がある。

ある日の母は、仕事先から家へ帰ると同居していた実母に

「今から見合いに行くよ」

と告げられて、慌てて洋服を着替えた。出会った場所は市内の小さく古びた喫茶店。父はうつむきっぱなしで何も言葉を発しない。父の母親は前歯にはめ込んだ金歯を光らせな

がら、父の代わりに何かとよくしゃべった。

「この子、年寄りにはモテますんやけど、若い娘にはからつきしですねん」

母の実母は自宅に戻ってからそつとささやいた。

「あんたも二十六歳や。もう見合い話なんて来うへんで。変な男かもしれんけれど、公務員やし貯金もあるって言うところ。この人でええやんか」

母は焦っていた。高卒で保育士になって七年ほどになり、周囲の仲間はどうどん嫁いでいく。一刻も早く決めたかった。かくしてふたりは結婚する。出会いから、四ヶ月後には式を挙げていた。

父の勤務先は、レンガ造りの高い塀で囲まれたM県刑務所。ずいぶん古びた堀と重厚な門から、長い歴史が感じられる。堀の向こう側には初犯の者を中心に七百名ほどの人間が服役しているのだという。刑務所の前には大きな道路があり、向かいにはいくつもアパートが立ち並んでいる。そのアパートが、刑務所に勤める職員と家族が暮らす、いわゆる「官舎」だった。父と母はそこから結婚生活を始めた。

三十年ほど前、官舎はまだ木造だったという。当時は、入居者同士の交流も篤く妻だけが集まる会合などもあったらしい。結婚したばかり、まだ二十六歳だった母も集まりに顔を出し、ほかの奥様方の語る世間話に相槌を繰り返す。会合に誘われたとき「グラスを持

つてきてね」と言われ、わざわざワイングラスを一つだけ買い持参したところ、ほかの人たちが持つてきていたのはただのコップだったという思い出を苦々しげに語ったことがある。

私と同じく、人付き合いが苦手で泣き寝入りの得意な内弁慶な母である。〃夫の勤務先がM県刑務所〃というだけの共通点しか持たない女の集まりで、話題の中心になるような会話をし、うまく立ち回っていたとは思えない。古びた木造官舎の妻同士の集まりに不似合いなワイングラスを持つて、ただ、あいまいで人畜無害な笑みを浮かべ、ほかの人の顔色を眺めて時間を過ごしていたのだろう。

官舎での暮らしになじみ始めたころ、母は私を妊娠する。結婚から一年と一ヶ月後には私が生まれた。出産の日、父は仕事で不在。母は産婦人科まで歩いて出掛けた。春の日差しの中とはいえ、道端に咲く花を眺めるような余裕はない。陣痛に耐え張り詰めた腹部を氣遣いながら歩いたのだろう。病院に着いてからも私はなかなか出てこようとはしない。長い時間を経てへその緒を首に巻き付けて、真夜中に生まれた。

朝を迎え、病院を訪れた父が初対面のわが子に放った言葉は

「この子の顔、僕の好みと違うなあ」

だったという。何の氣遣いもデリカシーも感じられないこのセリフが、なんだかあまり

にも父らしい。家族のことも常に他人事で、自分の世界だけで生きている人だった。母はこのときの父の態度を、その後何度も何度も繰り返した。

母は産後数週間の休みを取った後すぐ、結婚前から勤務していた町はずれの児童養護施設の仕事に復帰した。私は官舎から自動車で三十分ほど走ったところにある母方の祖母の家に預けられることになる。

その後、またすぐに母は妊娠。それを機に、一家は官舎を出た。家賃は格安で、交通の便だって悪くはない好条件の官舎。そこをたった二年と少しで出ることにした理由は、女ばかりの会合に参加することが苦痛だったから……といつかこぼしていた。

刑務所の官舎を出て両親がローンを組み購入したマイホームは、祖母が住む新興住宅地内にあった。そっくりなかたちの平屋建ての家が五百軒も立ち並ぶ。住民のほとんどは団塊の世代とその子供たち。似たような生活水準で、似かよった家族がたくさん暮らす街で、私は育った。

確か部屋数は四つで居間にはアップライトピアノと十四型のダイヤル式テレビが置かれていた。壁面には、棚をしつらえてそこにずらりと貯金箱を並べていた。家に引越してきて間もなく生まれた妹の洋子と私と母が寝る寝室。その隣の一室が父の部屋だった。

夜、眠るとき母は熱心に私たちに絵本を読んでくれた。保育士だったのでたくさん絵本を持っていたのだ。声色を変え、登場人物になりきって物語を読み上げる。まるでひと

り芝居のような趣があつた。あれほど熱心に絵本を演じ上げる人間をほかに知らない。そして、読み終わると必ず子供たちに感想を言わせようとする。私は母の満足するような気の利いた感想を言うことができなかった。今でも映画などを見た後で、なぜかピントのずれたことを口にしてしまうことが多い。母が好みそうな「子供らしい」言葉を口にすることができなかった。洋子は逆に無邪気にかわいらしいことを言う。

なかでも母は『さるかに合戦』について、洋子が言った

「かにちゃん死んだん？　かわいそなー」

というフレーズをとりわけ気に入り、口真似を繰り返していた。

ときどき、母は父に私たちを寝かしつけるよう命じていた。そのとき、父が絵本の読み聞かせを怠ると母は烈火のごとく逆上した。そのころの母は、始まつたばかりの子育てにきつと必死だつたのだろう。眠りに就く前に、真つ赤な顔で父を怒鳴り罵り狂う姿をしばしば見た。

「なんで絵本を読んであげないのよ。なんで子育てを私にばかりやらせようとするの」

と大声で叫ぶ母の声を聞きながら、私は内心「別に絵本なんて読んでもらわなくてもいいのになあ」と思っていた。母の情熱たつぷりの朗読に比べれば、父の音読は棒読みで差は歴然としている。絵本を読み上げることを面倒くさがっているのは、子供の私にだってよく分かつた。

しばらくすると、わが家にラジカセと昔話の収録されたカセットテープが登場した。きっと母がどこかで買ってきたものなのだろう。寝る前にはもちろん、自動車に乗ってどこかへ出掛けるときなどにも必ず聞かされていた。そのテープに収録されていた昔話のナレーションと、同時に収められていたテーマ曲はいまだにそらんじることができる。テープが伸びるほど、繰り返して聞いて育った。

母の熱心な読み聞かせの成果もあってか、洋子は二歳にしてひらがなとカタカナの読み書きができた。親の期待に応え、ものごとを器用にこなす妹を母はそのころから自慢の種にしていた。いつばう私が文字を覚えたのはその数年後である。

両親には安定した職があり、子宝にも恵まれている。何の不安もない、どこにでもいる家族のはず。それなのに、母が父に対して泣きながら怒鳴る場面は日常的だった。母は父のことをホームレスを意味する差別用語で呼び、いつも小馬鹿にするような発言をしていた。そのわりに、夫婦仲は良かったのだろう。私が三歳になったときには両親にとって三人目の子供、待望の長男である弟の英樹が生まれた。母の陣痛が起こったとき、洋子は心配そうな顔で

「ぽんぽん（腹部）痛いん？　ぼーいん（病院）行つとおいー？（行つてきたら？）」

と言ったという。私はそうした場面でも母の心を揺さぶるような良いコメントは出せない。母は、洋子の言葉にずいぶん慰められ感激したと後々まで語っていた。そうした言葉

を聞くたびにやるせなく、洋子がうらやましくなった。

子供が増えて、母は相変わらず多忙だった。夜勤に出るとき、私たち兄弟は近所にある母方の祖母の家に預けられる。祖母は孫である私が生まれた時点ではまだ五十歳。若いおばあちゃんだった。

私の心の支えは長らくこの祖母だった。

無邪気でかわいらしい妹弟たちとは違い、不器用で大人の望むような言動ができなかった自分を拒否しなかった。

祖母は貧しい家に生まれ育ち尋常小学校を卒業してすぐに働きだしたという。無学な人間だったが、人当たりの良さと勤勉さを持っていた。そして、田舎とはいえ一軒家を自分の稼ぎで買い取り暮らしをしていた。

私は生後間もないころから、祖母の家で過ごす時間が長かった。祖母の家にはこれといったおもちゃがなく、新聞に折り込まれている広告の裏に絵を描いて過ごすことが多かった。祖母が落書き帳を買って与えてくれたこともあったが、真つ白い紙に絵を描いてしまうことがもつたような気がしてなかなか使えない。落書き帳は高級品だと思っていたのだ。そもそも私にはおもちゃをねだるという発想がなかった。祖母に与えられる菓子の包装紙、例えば飴やガムの包み紙をていねいに開いて集め、ときどき眺めてはそれだけで満足していた。

三歳からは、保育園に通うことになった。

白いフェンスに囲まれたその保育園の三歳児クラスは、男児四人、女児三人の合計七人の七人しかいなかった。牛乳を毎日飲まなければならないことが苦痛だったが、給食の時間は楽しみだった。ミッフィーちゃんの絵が描かれたプラスチックの容器に盛られた、家では食べたことのないようなご飯が食べられる。三時になるとおやつ時間もあつた。お昼寝の時間だけは嫌いだったが、概ね楽しくやれていたと思う。

ある日の昼下がりに、いつものように園庭で遊んでいると別のクラスの先生に声を掛けられた。

「担任の先生があなたのことでずっと怒っているから、早く行きなさい」

と言う。急いで、担任の先生のいるところへ向かった。一体何をしてしまったのだろうかと不安で悲しくなつてきた。何の心当たりもなかったけれど、とにかく謝らなければならぬと考え、泣きながら先生の前に立った。先生はイスに座り、ほかの職員たちと談笑していた。涙を流しながら

「ごめんなさい」

と言うと、

「あんたは何をしに保育園に来とるんや？」